KANSAI＊OSAKA

文化力

No.135

2021/SPRING・春

関西から文化力 POWER OF CULTURE

特集

改元記念シンポジウム

古代首都なにわと八十島祭

岡田荘司氏・ロバート キャンベル氏・高島幸次氏・玉岡かおる氏・渡邊あゆみ氏

トップインタビュー 企業と文化

佐々木正人氏（株式会社 竹中工務店 取締役 執行役員社長）

助成事業の紹介

日本万国博覧会記念基金（Peace Art Project in ひろしま実行委員会 ほか）

アーツサポート関西（Osaka Shion Wind Orchestra ほか）

KANSAI SPIRITS

美術作家 佃 七緒さん

関西スクールマーチング2020

令和2年度 関西元気文化圏賞 受賞者発表

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会

表紙:玉岡かおる氏
（作家・大阪芸術大学教授）

特集レポート

改元記念シンポジウム

令和２年度日本博イノベーション型プロジェクト
助成：文化庁／独立行政法人日本芸術文化振興会

古代首都なにわと八十島祭

～古きを知り・大阪の明日を想う～

平安時代から鎌倉時代にかけて、
新天皇が即位されて大嘗祭が行われた次の年、
大阪・難波（なにわ）で、数百人規模の宮中祭祀が行われていました。
天皇即位儀礼の一つ「八十島祭」です。
これはどんなお祭りで、
なぜ大阪で行われていたのでしょうか。
関西・大阪21世紀協会は、
平成から令和への御代替わりを機に、
この八十島祭の伝統を掘り起こし、
古代大阪の歴史を再考するシンポジウムを開催しました。

（２０２０年11月30日・松下ＩＭＰホールにて実施）
主催・関西・大阪21世紀協会
共催・大阪観光局、フェスティバーロ
後援・関西経済連合会、関西経済同友会

古代首都「難波宮」の基壇跡（大阪市中央区・難波宮跡公園）。孝徳天皇が即位した645年、ここで大化改新が行われた。

関西・大阪21世紀協会
理事長　**﨑元利樹**

古来、日本人は万物に魂が宿ると信じ、畏敬の念を抱いてきました。古代においては、難波・八十島を日本の国土に見立てて、島々の神霊を新たに即位した天皇の身体にいただくことで、国土の繁栄と安寧を祈る「八十島祭」が行われていました。これは日本人の自然観を象徴するものです。

当協会は、文化庁が推進する「日本博」事業に、本シンポジウムをはじめとする八十島祭の伝統を掘り起こす取り組みを提案し、採択されました。時代が平成から令和になった節目に、大阪・難波の歴史の厚みを見直すとともに、日本人のアイデンティティを再認識する機会にしたいと考えています。また、2025年大阪・関西万博の開催に向け、大阪の魅力を発信するヒントを探り、大阪・関西の活性化に貢献する機会となれば幸いです。

日本博…文化庁が推進する2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に、総合テーマ「日本と自然」のもと、「日本の美」を体現する美術展や舞台芸術公演、文化芸術祭などを全国で展開するプロジェクト。

本シンポジウムは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、無観客にて行いました。協会賛助会員の皆様およびシンポジウムに参加を希望されていた方々には、当日の模様を収録した映像をオンラインでご視聴いただきました。

八十島祭

岡田荘司氏
國學院大學名誉教授

即位儀礼として重視

天皇の即位儀式として重要な大嘗祭は、7世紀後半の天武天皇の時代から始まりました。そして、これと併せて重要なのが、平安時代に始まる「八十島祭」という儀式でした。御代が替わるごとに天皇の身体の保全を図るもので、天皇に遣わされた祭使たちによって、難波の津で執り行われました。

この儀式の最も古い記録は、平安時代初期の国史の一つである『文徳天皇実録』（文徳天皇：827-858年）に見られます。嘉祥3（850）年に、天皇の遣いである宮主（みやじ＝占いや祓いを行う天皇専属の祓い師）、神琴師（しんきんし＝琴を鳴らす遣い）、典侍（ないしのすけ＝宮中で天皇のお側近くに仕える高位の女官）、御巫（みかんなぎ＝神事に奉仕した巫女）などが、「摂津国に向かひ、八十島を祭る」と書かれています。八十島という言葉は多くの島々（＝国土）を意味し、国生み神話に基づいた国土の生成発展を象徴しています。

八十島祭は、鎌倉時代初期・後堀河天皇時代の1224年まで、374年間にわたり22回行われました。初回だけは大嘗祭の前年に行われましたが、以後は大嘗祭の翌年に行われています。また、戦乱で中止されたことや、鎌倉時代に入ると即位の数年後に行われたこともありました。

八十島祭の式次第

八十島祭は、内裏（京都御所）から出立する「使立（つかいだち）」の儀式で始まります。宮主が天皇に御麻（おおぬさ）を奉り、天皇はこれを撫でて息を吹きかけて返されます。その後、典侍が御衣（おんぞ＝天皇の着衣）の入った箱を受け取り、宮主らとともに祭場である難波の津へと向かいますが、祭場の正確な場所は分かっていません。

難波の津に着くと、まず宮主が西に向かって御麻を捧げ、お祓いをします。次に典侍が箱から御衣を取り出し、西方の海に向かって振り動かして海風を受けます。この作法には、大八洲（おおやしま＝日本の古称）の島々の神霊を天皇の御身体にいただくという意味があります。天皇の御身体の保全を祈ることは、すなわち国家、国土、国民の安寧と安泰を祈念することであり、この祭祀の本義はそこにあるのです。

こうして最後に祭物や神饌を海へ投げ入れ、内裏へ帰還した典侍は、御衣を天皇に返上します。このとき遣いの祭使は、「御祭平安に奉仕（おんまつりへいあんにつかえまつる）」と奏上します。

西に向かって

昭和の初めに制作された絵巻『八十島祭絵詞』には、平安時代後期の八十島祭のようすが描かれています（下図参照）。ここでは住吉の浜まで出かけて祭りを行っていますが、難波の津であれ、住吉の浜であれ、重要なのは西の海に向かって行っていることです。大嘗祭は御所から伊勢神宮のある東または東南に向かって行われますが、八十島祭は西に向かって行われるのです。「八十島」という言葉は日本の国土を象徴しており、国生み神話の淡路島をはじめ瀬戸内海の島々、さらにはそこから日本全体にわたる広がりを意味しています。つまり西を向くということは、日本の国土を見晴らしているのです。

また、御麻によるお祓いの作法などは住吉信仰に繋がりますし、御衣に西からの海風を受けて八十島の神霊をいただくという作法は、生國魂（いくくにたま）信仰に繋がります。さらに、海に向かってお供え物を投げ入れるというのは、島々に宿る神のご加護をいただくという国生み神話に基づくもので、日本の国土の生成発展を象徴する儀礼でもあります。

伊勢に向かって東向きに行う大嘗祭が最も大事なことはいうまでもありませんが、それとともに重要視されていたのが八十島祭です。古代から中世前半にかけて、西に向かって天皇の遣いが派遣され、「海の大嘗祭」ともいうべきお祭りが行われていたことは、歴史的にも文化的にも、大きな意味を持っていると思います。

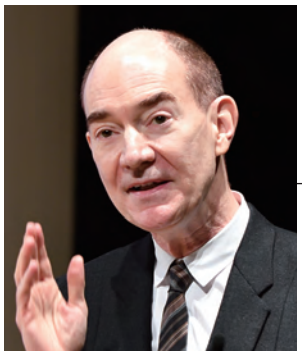
岡田荘司氏　1948年、神奈川県出身。73年、國學院大學大學院文学研究科修士課程修了。國學院大學神道文化学部教授、同学部長、神道宗教学会会長などを歴任。主要編著書に『平安時代の国家と祭祀』、『日本神道史』、『大嘗祭と古代の祭祀』など。

『八十島祭絵詞』第1巻
＜京都御所を出立＞

八十島祭を斎行する宮主が、出立にあたって内裏に参内。高位の女官・典侍が天皇の御衣を受け取ります。

（p9に『八十島祭絵詞』を解説しています）

豊國神社所蔵



前近代日本の価値を情報発信する方法

ロバート キャンベル氏
国文学研究資料館 館長

古典籍を活用する

国文学研究資料館（国文研）は、日本の1300年間のさまざまな歴史記録や、明治期以前の「古典籍」と呼ばれる書物などを約2万点所蔵しています。国文研はこれらをデジタルアーカイブ化し、日本文化の多様性と魅力を広く発信するプロジェクトを進めています。こうして大学共同利用機関としてのミッションに加え、一般の人々の学びに応え、未来に向けたイノベーションにも貢献したいと願っています。

本日は、八十島祭をテーマとするシンポジウムにあたり、日本文化を理解するため、古い文献や資料にどのようにアクセスし、新たな価値創造につなげていくかを、国文研の活動と併せてお話しいたします。

古典籍から得られる情報はとても多くあります。当時の人々が書物からどういう感性や知識を得ていたのかを知ることは、私たちの未来を豊かにするヒントを得ることにもつながります。国文研が2017年から公開している「新日本古典籍総合データベース」は、そうした取り組みです。キーワードから古典籍が検索できるもので、例えば、大阪で建物や庭を設計するにあたって、歴史的な和のテイストを取り入れたいと考えたとき、これを使って17～18世紀の大阪の意匠を調べることができます。八十島祭のような文化資源を探し出し、大阪の魅力を再発見したり、それを観光施策に活用したりすることもできます。

この度、凸版印刷が『八十島祭絵詞』をデジタル4K動画にされました。私たちも4年前から同社と協力して、国文研が所蔵する文化財をデジタル画像にして活用する「デジタル発和書の旅」という共創プロジェクトを進めています。ここで重要なことは、古典籍の情報を使って何をするかです。

江戸時代の人々の心

18世紀後半から明治時代まで、日本各地で毎年のように「絵入り地誌」というものがつくられました。安全に楽しく街道を旅するための、宿場や寺社、名所などの絵や解説が入ったツアーガイドのようなものです。私たちは文献観光資源学と呼んでこれを研究しており、歴史に埋もれて忘れられている事柄を再発見することを重視しています。

こうした文献は日本各地に数多く見られます。関西では18世紀から19世紀の初めにかけて、秋里籬島（あきさとりとう）が、京都や伊勢、近江など数多くの名所図会（絵入り地誌）を作りました。これは江戸にも影響を与え、斎藤月岑（さいとうげっしん）が『江戸名所図会』という20冊もの大作を著わしました。

大阪では『摂津名所図会』が有名です。堂島の米会所や天満の青物市場など、当地の賑わいが絵と文字で描かれており、ページをめくりながら、まさに空間移動をしているような気分にさせてくれます。また、伊丹の酒造りや堺の鉄砲鍛冶、天神祭の奉納花火や船渡御など、仕事や観光、娯楽、信仰について、当時の人たちがどのような風景に心を寄せていたかが分かる貴重な資料でもあります。

古典籍を活用して新たなものを生み出すことは、とても重要です。アニメーション作家の山村浩二さんは、江戸中期の浮世絵師・鍬形蕙斎（くわがたけいさい）の絵をモチーフに、『ゆめみのえ』というアニメーション短編作品を作り、ヨーロッパの映画祭で受賞しています。このように、大阪をテーマとして、大阪や関西のアーティストと地域の歴史資料とをコラボレーションさせた作品を生み出すこともできるでしょう。東京では三越伊勢丹百貨店で、江戸時代の料理レシピ本から当時の料理を再現するワークショップとセミナーを開催しました。

このように、さまざまな歴史記録を大阪で培われたスピリットを活かし、新たな勇気や豊かさにつなげる活動に、微力ながら尽くしていきたいと思っています。

ロバート キャンベル氏　ニューヨーク市出身。専門は江戸・明治時代の文学。江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。テレビのニュース・コメンテーターや新聞・雑誌連載、書評、ラジオ番組出演など、さまざまなメディアで活躍。

『八十島祭絵詞』第1巻
＜京都御所から淀の津へ＞

御所を出立した一行が、淀川を舟で下るため淀の津へ向かいます。百種ものお供物も用意されました。

日本人の自然観を見つめ直す

総合司会
渡邊あゆみ氏
NHK放送研修センター
エグゼクティブ・アナウンサー

ロバート キャンベル氏
国文学研究資料館長

高島幸次氏
大阪大学招聘教授

玉岡かおる氏
作家・大阪芸術大学教授

なぜ復活しなかったのか

渡邊　古代なにわで八十島祭が行われていたことを、どのようにお考えでしょうか。

高島　天皇の御衣に海風を当てて神霊を受け、それをお召しになることで国の統治権を得るという八十島祭の考えは、海外にも似たような例があります。イギリスの文化人類学者・ジェームズ フレイザー（1854～1941年）による「感染呪術」という概念で、ある人が身に着けたり触れたりしたものは、その人から離れても何かが宿っているという考えです。好きな人が持っていたハンカチを自分が持っていると、その人がそばにいるような感じがするというものですね。八十島祭にそうした感染呪術の概念があるとすれば、それは現代にも通じる感覚だと思います。

玉岡　八十島と聞いて思い浮べるのは、百人一首の参議・小野篁（おののたかむら）の「わたのはら 八十島かけて漕ぎ出でぬと 人には告げよ海人のつり舟」です。八十島とはたくさんの島々のことで、関西人であれば瀬戸内海を思い浮べるでしょう。そこでは海や島という自然に意識が向きがちですが、人の存在も忘れてはなりません。古代の為政者が瀬戸内海から得たいものを想像すれば、船で島々を駆け巡る勢力が考えられるでしょう。天皇も、秋津島（あきつしま＝大和の古称）の島神様の力を得ることと併せ、水軍のような力強い人々を支配下に置きたいと思われたのではないかと想像します。

高島　おっしゃる通りだと思います。歴史の中に「海民」という言葉があります。天皇家や平氏は海民です。

玉岡　私が小説にも描いた孝謙（称徳）天皇の御代には遣唐使が出航した回数が多く、たびたび難波の津に使者が派遣されています。しかし、即位の翌年に難波の津へ遣わされた使者となると、遣唐使がらみではない。何か特別な目的のためだった。つまり八十島祭のためだったとわかりました。

キャンベル　光格天皇時代の天明8（1788）年に京都で大火があり、それをきっかけに平安時代の様式で内裏を修復しようという動きがありました。部屋割りや調度類、神殿、和歌や音楽にいたるまで、古い文献を考証して再現したのです。このとき八十島祭についても考証されました。

『八十島祭絵詞』第1巻
＜鳥羽伏見を通り淀の津へ＞
行列は都大路を進み、鳥羽伏見を通って淀の津へ向かいます。典侍は「唐庇車（からびさしのくるま）」と呼ばれる最上格の牛車に乗りました。

高島　そうなんですか。八十島祭は1224年を最後に現在まで途絶えたまま、人々に忘れられていたのかと思っていました。光格天皇の時代に一度注目されていたのですね。

キャンベル　実際に儀式が再現されたかどうかまでは分かりませんが、非常に興味深いことですね。

玉岡　壬申の乱のように力で皇位を奪い合う時代では、どんなに造作をかけてでも、自分が新しい天皇であることを広く知らしめる必要があったでしょう。そういう強い動機がなければ、八十島祭を復活させることはできなかったのだろうと思います。

高島　八十島祭を行うために、京都から100人以上の煌びやかな行列を作って難波の津までやってきました。これは大嘗祭では出せない大きな宣伝力となります。

玉岡　出船・入船がひしめく難波の津で大勢で何かをしていると、その情報はたちまち瀬戸内を経由して各地へ伝播していきます。だから難波でやることに意味があったのだと思います。

八十島タイタニック説

キャンベル　私は、2025年大阪・関西万博のシニアアドバイザーとして、夢洲を視察しました。その埋立地に立って、大阪は海のまちだと実感するとともに、吹き通る風がいろんなものを浄化しているような感じさえ持ちました。西を向くと神戸やその先が見渡せます。中世の難波の津からもそうした景色が見渡せたでしょう。そう考えると、万博で大阪の歴史・文化の力をアピールしなければならないと強く感じましたし、絶好の機会だと思いました。

高島　夢洲や咲州など数多くの埋立地がある大阪湾は、現代の八十島という見方もできますね。キャンベル先生、万博会場に八十島を記念するモニュメントを作ってくださいよ。

キャンベル　「いのち輝く」というテーマには、祈りや鎮魂という概念も含まれます。それを象徴するのが造形物なのか精神文化なのか…。

玉岡　私は今、北前船をテーマにした小説を書いている関係で、船で安治川、木津川の河口から大阪湾に出たことがあります。そこで咲州、夢洲の風景を見て八十島を実感しました。昔は四天王寺あたりまで海が迫っており、そこから西に沈む美しい夕陽を眺めることができました。今は地形が変わってしまい、ビルが建ち並んでいますので、大阪に住んでいる人たちは、ここが海だったとイメージしにくいのです。でも、河口に立って海に沈んでいく夕陽を見れば、大阪はまさに西に向かった海のまちだと実感できると思います。残念なのは、そうした立地を想像できるランドマークがないことです。

高島　天皇が難波宮におられたときは、典侍ではなくご自身が目の前の海に行き、大海原の風を受ける八十島祭が行えたでしょう。天皇が岬の突端で両手を広げて風を受けている姿は、映画『タイタニック』の名シーンを彷彿させます。私はこれを「八十島タイタニック説」と呼んでいます。映画では女性が手を広げて、男性が後ろで支えていますが、八十島祭の時代は幼帝が即位することが多く、典侍となる女官に支えられていたかもしれません。万博を機に、夢洲や咲州にカップルで大海原の息吹を受けて命を感じられる場所をつくればどうでしょうか。私は、古代は専門外なので、無責任で気楽な提案ですが。

渡邊　奈良時代には大阪湾から四天王寺がよく見え、その威容を示すことで国家権力の整った国であることを内外にアピールしたそうです。そう考えると、大阪は、二度目の万博が開催される場所として意味があると思います。残念なのは、天皇がおられる東京から遠いことです。京都の人は今でも、天皇が御所に戻ってこられる日が来ると信じておられるそうですね。

玉岡　冷泉家などでは、「天皇はちょっと東京へ行っておられるだけで、150年間お帰りを待っています」とおっしゃっています。

女性が祭儀をする意味

キャンベル　京都から大阪まで大勢の煌びやかな人たちが長い道のりを行進し、人々の目に触れたことは、玉岡さんがおっ

『八十島祭絵詞』第1巻
＜鳥羽伏見を通り淀の津へ＞

行列は、典侍や宮主をはじめ、貴族、官吏、従者で構成されました。貴族や官吏は馬に乗って移動、武士たちは弓矢で武装しています。

しゃるように、単なる神事としてではなく、天皇の威信を示す目的もあったと思います。高島先生が指摘されたように、9世紀以前は都と祭場が近かったので、幼帝自らが八十島祭に臨んだとも考えられるでしょう。あるいは、幼い天皇に代わって、乳母（めのと）が祭祀の作法を行ったかもしれません。いずれにせよ、女官の典侍が箱を開けて海風に向かって御衣を揺らすという作法はとても美しく、能のような幽玄な趣きを感じます。

高島　しかもバックでお琴が奏でられている。なんとも風雅です。

玉岡　ここはやはり女性でなければ駄目だったと思いますね。天照大御神が天岩戸に隠れたとき、天鈿女命（あめのうずめのみこと）という女神様の踊りで窮地が救われたように、優雅で美しいものを見せて神様の気を引くという日本神話があります。難波の津から西を向いて行うということは、おのころ島（淡路島）の国生み神話、つまりイザナギノミコト、イザナミノミコトにつながる祭儀だと思います。こうした神話に基づくとすれば、天皇ご自身より、女性が優雅に御衣を振り動かすことに意味があると思います。

どこまでが「西」なのか

高島　岡田先生は先ほどの基調講演の中で、東向きの大嘗祭、西向きの八十島祭ということを強調されていました。かつての宮中祭祀にそういう西と東の使い分けがあったとしたら、現在、「東」だけしか行わなれていないことが気になります。

玉岡　西と東のセットで行うことに意味があると思います。高島先生が海民のお話をされましたが、瀬戸内海の先には四国や九州や対馬といった大きな島がありますから、そこに住む人々を納得させるにも、やはり国生み神話に則って「西」で行う必要があったのではないかと思います。国民は天照大御神とイザナギノミコト、イザナミノミコトに守られているということで納得するでしょうから。

キャンベル　どのあたりまでを「西」と呼ぶのでしょうか。瀬戸内海を西に行けば豊前の国、日向の国があり、その先には神話に出てくる高天原（天界の国）があります。鎮西は九州であったわけですが、どのあたりが西の結界だと思われますか。

玉岡　関西人の祖先は、「西」という概念に境界をつくっていなかったと思います。遣唐使を出した孝謙（称徳）天皇は、おそらく唐土の国（中国）の先を大陸というものも含めて西域と考えていたと思います。それが鎌倉期になると浄土思想が生まれ、人々は、浄土すなわち遥か西の彼方は無限であるという感覚を持っていたのではないでしょうか。太陽が上ってくるところは見えているが、沈む先は無限であるという感覚ですね。

高島　そう考えると、御衣に西からの海風を受けたということと整合します。風の起源はどこだとは言えませんからね。

玉岡　西から運ばれる無限のパワーをいただくということでしょう。

渡邊　関西の人の地理感覚は、他の地域の人とは違うように思います。神戸の人は、北に山、南に海という方向感覚を持っているそうです。これは関東平野に住む人とは異なる感覚です。そう考えると、難波の津から西に向かい瀬戸内海を介して世界につながるいうのは、関西人の感覚なのだと思います。

高島　その感覚は、八十島祭が行われていた時代はもっとはっきりしていたでしょう。上町台地のすぐ西の際には浜辺があって、波風が押し寄せ、海風が吹いてくる。当時の人は、現代人以上に西や海に不思議なものを感じていたのだと思います。

『八十島祭絵詞』第2巻
<渡辺の津へ上陸>

舟で淀の津を出発した行列が、渡辺の津（現在の大阪市北区天満橋あたり）へ上陸しました。

玉岡　難波の津から西を眺めると、遠くに須磨の高取山が見えて、そこで畿内が終わります。須磨は「隅っこ」が転じた地名だといわれるぐらいなので、古代人は、その辺りが「畿（みやこ）」（天皇の直轄地）の限界だと感じていたのでしょう。

高島　難波宮の後に政治上の都は転々と移りますが、必ず難波の津に戻って八十島祭を行っていたのは、ここが「心の都」だったからでしょう。

キャンベル　江戸時代の大阪の絵を見ると、「太鼓橋、帆かけ船、松原」の3つで「住吉大社」を描いているものが多くあります。この3つだけで、難波、住吉だと分かるような場所は江戸にはありません。

玉岡　北前船の船乗りたちは、北陸、東北、江差（北海道）の神社に「住吉」を描いた絵馬を奉納しました。彼らは、住吉さんが海の神様だと信じていたからこそ、そうして航海の無事を祈ったのです。住吉大神は、イザナギノミコトが黄泉の国から帰って来た際、禊ぎをしたときに生まれた三神の総称です。そう考えると、国生み神話に通じるという意味で、住吉の神に祈るというのが八十島祭の基本だったと思います。

キャンベル　江差の神社にまで住吉の絵馬が奉納されているとは、とても興味深いお話ですね。

高島　現在、天王寺区にある生國魂神社（祭神は大八洲の神霊である生島大神、足島大神）は、当初は上町台地の先端に鎮座し、八十島祭に深く関わっていましたが、いつしか祭場も住吉大社（祭神は海の神である筒男三神と神功皇后）に近い浜に移されます。西に海を臨むということでは共通しています。

未来を望む場所

渡邊　2025年に万博を控えている大阪の未来、あるいは日本全体から見て、八十島祭にどのような意義を見出すべきでしょうか。

玉岡　難波の津が「心の都だった」という考えは同感です。時代が変わり、西の世界が無限ではなくなっても、やはり難波の津はホームポジションだという思いです。夕陽の沈む先を見つめ、未来を考える地であらねばならないと思いますね。『続古今和歌集』に、最後の八十島祭のお遣いに立つはずだった兵部卿隆親（たかちか）の歌「みそぎせし　すゑとだに見よ住吉の神もむかしを忘れはてずば」があります。「かつてみそぎをした住吉の浜はここかと思って見ていきなさい。きっと神様も昔の儀式をお忘れではないから」という歌です。これは現代人にもいわれているような気がします。都が東京に移ってしまいましたが、心の都は未来を望む大阪だということを、誇りを持って知らなければならないと思います。

高島　全く同感です。平城京や平安京より前に大阪に都があり、八十島祭が行われていました。だから、インスタントラーメンや回転寿司は大阪発祥だと誇るのもいいけれど、もっと古いところから大阪のアイデンティティを見直すこともできる。八十島祭の再考を機に、そういう視点を持ってほしいですね。

キャンベル　新型コロナウイルスによって、日本そして世界で大変な日常が続いています。また、分断やポピュリズムなど、何を心の拠り所とすればいいのか分からないような時代にあって、八十島祭には直球で日本人の心に訴えるものがあります。つまり、大阪は生命や生活といった本質的なことを見つめ直す格好の場所であり、八十島祭が受け継いできたことを知ることはとても大事だと思います。

渡邊　ありがとうございました。

高島幸次氏　1949年、大阪生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了。専門は日本近世史・天神信仰史。夙川学院短期大学教授、追手門学院大学客員教授などを経て、大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所員を兼務。2012年度大阪市市民表彰（文化功労）。

玉岡かおる氏　兵庫県生まれ。神戸女学院大学文学部卒。1987年『夢食い魚のブルー・グッドバイ』（新潮社）で神戸文学賞を受賞し、作家デビュー。2009年『お家さん』（新潮社）で織田作之助賞受賞。主な著書に、『姫君の賦　千姫流流』（PHP研究所）、『天平の女帝 孝謙称徳』（新潮社）など。

渡邊あゆみ氏　神奈川県生まれ。東京大学教養学部卒。1982年、NHK入局。4年目にNHKの看板番組の一つ『7時のニュース』のキャスターに抜擢。現在は『プレミアムカフェ』、『偉人たちの健康診断』、『ラジオ深夜便』などに出演。

『八十島祭絵詞』第2巻
<住吉の浜へ向かう>

渡辺の津に上陸した一行は、乗馬や牛車の装いを直した後、陸路・阿倍野道を通り住吉の浜（現在の住吉大社あたり）へ向かいました。

奉祝神楽舞

大八洲の守護神を讃える

生國魂の舞　生國魂神社

明治天皇の御歌「産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の 母にぞありける」（大地こそは偉大なる万物生成の母である）をもとに、昭和40（1965）年に宮内省の安倍季巌楽長が作曲。その後、子息の安倍季昌楽長により巫女舞として作舞されました。万物を生成する大地の働きは、大八洲（日本列島）の守護神である生國魂大神のおかげであり、その御神徳を讃えるため、毎年、重陽の節句（9月9日）に奉納されています。榊を持った巫女が、伶人（雅楽・神楽奏者）の演奏に合わせて優雅な舞を披露しました。

愛らしい幼子の仕草

紅わらべ　大阪天満宮

菅原道真公が5歳のときに詠まれた歌「美しや 紅の色なる 梅の花 あこが顔にも つけたくぞある」をもとに、梅を愛でる可愛い道真公を偲び、平成13（2001）年、元宮内庁式部職楽部の芝祐靖氏により作曲作舞された神楽舞。大阪天満宮をはじめ、各地の天満宮で天神様ゆかりの祭りの際に奉納されています。幼子の仕草を取り入れた可愛らしい舞振りが特徴。大阪天満宮神職の演奏に合わせて、同宮の神楽教室へ通う生徒が舞を披露しました。

奉祝和太鼓

国土生成の力強い響き

八十島太鼓　生國魂神社

日本国土の神霊（みたま）の生島大神、足島大神を祀る生國魂神社。八十島太鼓は、その御祭神の神威と神徳を讃えるものとして、平成24（2012）年に創作されました。同29（2017）年に八十島太鼓の会が発足。3年間の稽古を経て、令和2（2020）年に生國魂神社にて奉納演奏が行われました。舞台上から一般に披露されたのは、本シンポジウムが初めて。11人の出演者により、4つの部で構成された曲のダイジェストが披露されました。

先端技術を使った歴史や文化の紹介

目の前に字幕が出現

能「生國魂」　（公社）能楽協会／大日本印刷（株）

文化財や芸術作品のデジタルアーカイブ化に取り組む大日本印刷が、AR（拡張現実）技術*を使って、能「生國魂」を解説。「みどころグラス」と名付けたメガネ型の装置をかけて観ると、八十島祭のストーリーや能楽の解説などが字幕になって現れ、舞台から目をそらさずに集中して能を楽しむことができました。

＊スマホゲーム「ポケモンGO」のように、実在する風景にバーチャルの視覚情報を重ねて表示することで、目の前にある世界を仮想的に拡張する技術。

（能「生國魂」の画像は能楽協会提供）

『八十島祭絵詞』第2巻
＜住吉の浜に到着＞

一行が住吉の浜に到着。当初は熊河尻（現在地不明）という場所を祭場としていましたが、後年、住吉の浜に変更されました。

4Kデジタル動画で90年ぶりに全巻公開
――『八十島祭絵詞（えことば）』

『八十島祭絵詞』は、昭和天皇の即位礼（昭和3年11月10日・京都御所）を記念するとともに、「八十島祭」を後世に伝えるべく制作されました。全3巻・約54mにもおよぶ長大な絵巻物で、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇の即位儀礼の一環として行われた宮中祭祀「八十島祭」のようすが描かれています。豊國神社（大阪市中央区）社司の角正方氏の研究をもとに、書家の岡山高蔭氏が書、日本画家の津端道彦氏が絵を担当。大阪の各界の支援を受けて制作され、翌昭和4年に同社に奉納されました。

しかし、絵巻は長尺で展示が難しく、完成当初に一般公開されたものの、その後は長らく豊國神社に保管されていました。関西・大阪21世紀協会は、これをいつでもどこでも見られるようにするため、文化庁の助成を受けて『八十島祭絵詞』のデジタルデータ化を推進。2020年7月、凸版印刷株式会社が2日間かけて全巻を撮影し、それをつなぎ合わせた4Kデジタル動画を制作しました。

今回の改元記念シンポジウムでは、その全巻を公開するとともに、平安京から難波の津にいたる道中の、ゆかりの地を紹介する動画をご覧いただきました。大阪の歴史・文化を伝える新たなコンテンツとして、今後はインターネット配信やさまざまなイベントの機会で、多くの方々にご覧いただけるよう活用してまいります。

制作　関西・大阪21世紀協会
監修　高島幸次氏（大阪大学招聘教授）
編集　凸版印刷株式会社

古代の大阪は、東に河内湖を望み、中津川や三国川の河口にある大小の島々（八十島）を抱えた半島のような地形（上町台地）でした。ここで行われた「八十島祭」には、高位の女官・典侍(ないしのすけ)を中心に、都から派遣された大勢の人が参加。1160年の八十島祭では、平清盛の妻・時子が典侍を務め、貴族や警備の武士など数百人にもおよびました。『八十島祭絵詞』には、平安時代に行われたその道中のようすや、参加者の役割、人数などが記されています。

大阪湾

当初の祭場は熊河尻（現在地不明）でしたが、その後、住吉の浜（現在の住吉大社あたり）に移されました。

1 平安京
平安時代の内裏は、今の京都御所とは異なる場所にありました。現在の二条城を含む千本通のあたりを中心に、広大な宮殿が広がっていました。

2 淀の津
京都市伏見区納所町あたり。巨椋池という巨大な池に面し、一行はここから舟で摂津国・難波に向かいました。

3 渡辺の津
大阪市北区天満橋八軒家浜あたり。淀川を舟で下ってきた一行は、ここから陸路（熊野街道）で住吉の浜へ向かいました。

『八十島祭絵詞』第2巻
＜住吉の浜で斎行＞

浜辺に儀式の祭場が設けられ、宮主のほか大勢の貴族や官吏も参列する中で斎行されました。

4熊野街道
渡辺の津から熊野三山への参詣に利用された街道。一行はここから阿倍野道を通り、住吉の浜へ向かいました。

5住吉大社（大阪市住吉区）
祭場が住吉の浜に移されてから、生島・足島の神とあわせて海とのつながりが深い住吉の神々が祀られるようになりました。

6生國魂神社（大阪市天王寺区）
八十島祭では、神武天皇によって日本の国土の神霊とされた生島・足島の二神が祀られました。この祭神は今も生國魂神社に祀られています。

『八十島祭絵詞』第2巻
＜住吉の浜での祭儀＞

住吉の浜辺に祭場が設けられ、典侍（右奥）が参列。百種の神饌が供えられた祭壇を前に宮主（白装束）がお祓いをした後、琴が奏でられる中、典侍が御衣を振り動かして海風を受け、「大八洲の霊」を衣にいただきました。

株式会社 竹中工務店
取締役 執行役員社長
佐々木 正人（ささき まさと）氏

棟梁精神を受け継ぎ 最良の作品を世に遺し社会に貢献

手がけた建物を「作品」と呼び、「最良の作品を世に遺し、社会に貢献する」を経営理念に掲げる竹中工務店。創業400年・会社創立120年以上の長い歴史を持つ同社は、建築文化の発信・振興に加え、人材育成や地域活性化にも積極的に取り組んでいる。そうした活動や社業を通した文化への思いについて、当協会理事長の﨑元利樹が伺った。

「工務店」に込めた思い

﨑元　御社は、会社創立以来「竹中工務店」という社名でやってこられました。このお名前には、どのような思いが込められているのでしょうか。

佐々木　当社の社名は、合名会社を設立した1909年につけられました。建築専業で、設計と施工は切り離せないという宮大工の棟梁精神と伝統を受け継ぐ当社では、その考えを「工務」という言葉で表し、それにお客さまを大切にする思いから「店」を付けて「工務店」としたのです。お客さまのご注文に応えて良い作品（建物）をお渡しするためには、良い施工をしなければならないし、そのためには良い企画・設計をしなくてはなりません。社名には、そうした一連の仕事を自分たちの手で最善かつ責任を持って行うのだという決意が込められているのです。

﨑元　建築業界には「BCS賞*」というのがあります。発案されたのは御社の創立者である竹中藤右衛門さんですね。

佐々木　そうですね。BCS賞は、建築主様と設計者、施工者の三位一体による優れた建築作品を表彰するものです。単にデザインが良いというだけで判断せず、完成後も良い建物として社会の中で生きている状態を重視します。これは当社の経営理念にも通じるものです。

*BCS賞：「優秀な建築物をつくり出すためには、デザインだけでなく施工技術も重要であり、建築主、設計者、施工者の三者による理解と協力が必要」という建築業協会初代理事長竹中藤右衛門氏の発意により、昭和35（1960）年に創設された賞。

﨑元　建築と社会とのかかわりでいうと、御社は「まちづくり総合エンジニアリング企業」を掲げて活動されています。具体的にはどういうことでしょうか。

佐々木　竹中工務店は建物をつくる会社ですが、グループ全体としては土木やファシリティマネジメント（施設と周辺環境の総合的な管理・運営）、エンジニアリング、不動産などの関連企業が数多くあります。これら各社が緊密に連携し、それぞれの専門力を活かしてまちづくりの構想から建築、維持管理にいたるまで、お客さまや社会の最良のパートナーとなりたいと考えています。そして、建物をつくった後も、メンテナンスやリニューアルを通して次の時代へと受け継ぎ、サステナブル社会の実現に寄与していくことを目指しています。

併せて、事業領域を建築単体から「まち」へと広げることを視野に入れています。そのようななかで、地方都市の活性化等にも役に立ちたいという思いから、2019年に島根県雲南市と地域連携協定を結び、当社が持つ知見やノウハウを地域課題の解決に活かしていただこうとしています。これも「まちづくり総合エンジニアリング企業」としての趣旨に沿ったものです。

﨑元　話は変わりますが、今、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、さまざまな業種・業界が苦境に立たされています。建設業界ではいかがでしょうか。

佐々木　鉄道業や観光業のように直接的な打撃を受けている業界に比べると、建設業界への影響はまだ小さいという印象です。リーマンショックのときも金融業界はすぐに打撃を受けましたが、それが産業界に波及して設備投資や住宅着工数が減少し、建設業界が不景気に陥ったのは2年ほど経ってからでした。だから今後は気が抜けません。建設業界は請負仕事ですし、景気の波に左右されます。新型コロナの影響が長引いて社会経済活動が低下すれば、建築や設備投資を控えようという動きになり、経営環境は厳しくなるでしょう。

環境共生地域のシンボル

﨑元　手がけられた建物を「作品」と呼ばれる御社では、建築と文化の関わりをどのようにお考えでしょうか。

佐々木　住宅、事務所、ホテル、学校、工場などのさまざまな建物と、それらが連なってできる「まちなみ」は、日本の気候風土や社会経済活動を反映した文化です。当社は建築主様と一緒に最良の作品を世に遺すことで、まちなみから生まれる文化を発信し、次代につなげていくことに意義をおいています。

﨑元　そうしたご活動に数々のメセナアワード（公益社団法人企業メセナ協議会）が贈られ、社外から高く評価されていますね。なかでも「聴竹居（ちょうちくきょ）」は、2019年度のメセナ大賞を受賞されました。

聴竹居（国指定重要文化財）

佐々木　聴竹居は、当社に在籍し後に京都帝国大学教授（工学部建築学科）になった藤井厚二氏が、1928年に京都府・大山崎町に建てた自邸です。日本の気候風土に合い、日本人の身体に適した住宅を追い求めた藤井氏の研究の集大成といっていいでしょう。木造建築の伝統を随所に盛り込みつつ、日本の暑い夏を快適に過ごせるよう地下の冷気を取り込むチューブを埋め込んだり、西洋式のテーブルで食事ができる居間や、子ども部屋のような個室、今でいうダイニングキッチンのようなシステムをつくったりして、当時としては最先端の生活様式も取り入れています。藤井氏は、聴竹居の周辺でこうした環境共生住宅をいくつかつくっています。地元の方々から「まちのシンボルとなるので是非遺してほしい」という声が上がり、当社の創立120周年記念事業の一環として2016年に取得しました。ありがたいことに、聴竹居の公開やガイドなどは聴竹居を愛し地域を誇りに思う地元住民を中心とした一般社団法人聴竹居倶楽部の方々が行ってくださっています。

聞き手　**﨑元利樹**
公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 理事長

また、聴竹居がある大山崎町には、豊かな自然環境に加え、千利休の茶室「待庵（たいあん）」（国宝）や、サントリー山崎蒸溜所、アサヒビール大山崎山荘美術館、重要文化財の「宝積寺（ほうしゃくじ）」など、観光資源も豊富です。まちづくり総合エンジニアリング企業として、それらと合わせて、まち全体の魅力向上につなげていければと思っています。

工匠の心と技を伝える

﨑元　御社では建物をつくる大工道具も収集・保存されています。先日「竹中大工道具館」を見学させていただき、世界に誇る日本の木造建築文化を伝える、御社ならではの思いを感じました。

佐々木　竹中大工道具館は、当社の故竹中錬一相談役（創立者・竹中藤右衛門の長男）の発案で、1984年に設立されました。大工道具が手動から電動に変わる時代にあって、放っておいたら名工の大工道具が朽ち果ててしまうという危機感から、博物館を建てて優れた職人の精神と技術を後世に伝えようと考えたのです。収集した大工道具は35,000点におよび、そのうちの約1,000点を展示しています。2014年に、かつて当社が本社を置いていた神戸市中央区に新築して移転しました。

﨑元　建物自体も素晴らしく、年によっては国内外から6万人を超す入館者があったと伺いました。日本の木造建築をつくる知恵と技術が勉強になりますし、子どもたちの工作ワークショップも開かれると聞いて、親子でも楽しめると思いました。

竹中大工道具館（神戸市中央区）

建築を取り巻く文化を発信

﨑元　御社では、季刊誌『approach』の発行や『ギャラリーエークワッド』（東京都江東区）でのイベント企画など、建築文化を発信するさまざまな活動をされています。これにはどのような思いが込められているのでしょうか。

佐々木　『approach』には、「当社と建築、都市、社会とが相互にアプローチし、交流することを願う」という思いが込められています。特集テーマや記事企画を外部の方にお願いすることで、手前味噌になりがちな企業PR色を払拭しています。建築を取り巻く社会や自然、文化、歴史など、幅広い視野に立った内容で、私たち自身が気付かされることも多いですね。

季刊誌『approach』
1964年に創刊され、2020年冬号で第232号を数える。毎号11,000部を印刷し、竹中工務店の顧客のほか、国の研究機関や大学などにも配布。

ギャラリー エー クワッド
（東京都江東区）
撮影：光齋昇馬

『ギャラリーエークワッド』は、現代の建築文化を広く発信することを目的に、当社の東京本店の1階に開設しています。多くの人に建築を含めた文化に関心を持ってもらえるよう、展覧会や講演会、ワークショップなどユニークな企画を数多く行っています。例えば『100人の撮影会』というシリーズ企画では、一般参加者100人や招待者の方々に、レンズ付フィルムで東京都内の心に残る風景を撮ってきてもらい、その写真展を開催しています。これまでに浅草や日本橋、本郷など各所で撮影会を行い、数多くの写真が集まりました。

﨑元　地域それぞれに歴史や文化を物語る景観があり、建物はその重要な構成要素ですね。御社では、そうしたレガシーの活用事業もしておられると伺いました。

佐々木　社内で新規事業を募集したところ、歴史的に意義のある建物を文化財ととらえ、これを保存・活用する活動に協力してはどうかというアイデアが出され事業化しました。これは東京の九段下にある歴史的建物「旧山口萬吉邸」を新たにビジネスイノベーション拠点として運用するもので、当社を含む3社にて実施しています。また神戸にある旧ジェームス邸は、チャペルを新築の上、邸宅を新たにレストランや結婚式場として事業者の方にご活用いただいています。私たちは建築会社として、壊して建て直すばかりではなく、環境保全やサステナブルな観点から、建物の保存と活用の両立、用途変更による新たな価値創造にも取り組んでいます。

旧ジェームス邸（神戸市垂水区）

パイロットからのお礼

﨑元　御社が設立された「公益財団法人竹中育英会」では、年間60人ほどの学生に返還不要の奨学金を出されています。すばらしい取り組みですね。

佐々木　竹中育英会は、当社の創立者である竹中藤右衛門の「世のため人のために利益を社会に還元したい」という思いから1961年に設立されました。経済的理由で就学が難しい大学生や大学院生などに対して、返還義務のない奨学金を給付するもので、専攻や卒業後の進路も本人の自由です。私はかつて海外出張に行ったとき、搭乗した飛行機のパイロットから「その節は大変お世話になりました」とご伝言をいただいたことがあります。聞けば、竹中育英会の奨学金を受けて勉強し、パイロットになられたそうです。これ以外にも、いろんな機会で感謝のお言葉をいただくことがあります。

大阪・関西万博への期待

﨑元　2025年大阪・関西万博については、どのようにお考えでしょうか。

佐々木　当社は1970年の大阪万博で、ソ連館や松下館など約1/4の万博施設の建設に携わりました。「いのち輝く未来社会のデザイン」という開催テーマに沿って、関西における生命科学の先進性が示されると思いますが、当社としてはSDGsに示されている環境問題の解決にも貢献したいと考えています。当社が開発した耐火集成材の「燃エンウッド®」をパビリオン建設に使うなどして、環境に調和した持続可能な建築文化を発信できればと思っています。

また、現在、木造・木質建築を見直そうという機運が高まっています。利用者の健康や快適性について医学的な見地からも立証されていますが、小学校の校舎を木造にすると、子どもたちの声や元気さが違うとおっしゃる先生もおられます。

﨑元　林業に従事する人が減って、荒れ放題の山林があると聞きます。単に安価という理由で外国材に頼ってばかりいると、日本の山林が死んでしまうのではないかと危惧します。

佐々木　そうですね。国内の樹木により、都市に木の建築をつくることで地方の森林産業を活性化できます。そして、樹木を切った後に新たに木を植え、その生長でCO_2を吸収し、持続可能な森そして社会をつくる。当社は、このサイクルを「森林グランドサイクル®」と呼び、森林資源と地域経済の好循環を目指しています。そのためには、国産材を意図的に使うシステムをつくったり、材木の生産を近代化したりすることも重要です。大阪・関西万博では、そうしたことも注目されており、とても期待しています。

﨑元　本日はありがとうございました。

佐々木正人氏
1953年兵庫県出身。1977年東京大学工学部都市工学科を卒業後、竹中工務店入社。開発計画本部課長、関西プロジェクト推進本部長、常務執行役員、専務執行役員、取締役専務執行役員などを経て2019年3月より現職。

株式会社 竹中工務店
大阪市中央区本町4丁目1-13（大阪本店）。資本金500億円（2020年3月現在）、売上高1兆3,520億円（2019年度連結）、従業員数7,630人（2020年1月現在）。グループ会社／国内13社（建設、マネジメント・エンジニアリング事業）、海外10社（建設、開発事業）。

（写真提供：株式会社 竹中工務店）

実力校の演奏をウェブで配信

関西スクールマーチング 2020

（2020 年 12 月 26 日／関西・大阪 21 世紀協会ウェブサイトにて）

主催：公益財団法人関西・大阪21世紀協会　協力：関西吹奏楽連盟　協賛：大阪市高速電気軌道株式会社

関西・大阪21世紀協会では、関西の高校吹奏楽部の高い実力を広く知ってもらう機会として、2019年度は大阪城天守閣前広場で「大阪キャッスルマーチング」を開催しました。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響により、昨年同様の方式がかなわず、関西吹奏楽連盟推薦校の演奏を当協会のウェブサイトで配信することとしました。演奏にあたっては、出演した生徒の多くが、「新型コロナの影響で多くの演奏機会がなくなり、モチベーションを保つのが難しかったが、こうして発表の機会をいただけてよかった。後輩たちにも心を一つにしてこの困難を乗り切ってほしい」と呼びかけました。

当協会は、今後もその時々に応じた形で、吹奏楽を通して青少年の育成と大阪のブランディングに貢献していきます。

四條畷学園高等学校吹奏楽部 バーニング・ブレイバーズ

クラス全員が吹奏楽部員の「吹奏楽クラス」がある実力校。部員は同クラスを含め約150名。戦いに敗れたサムライが再び立ち上がり、勝利を手にするまでの物語を、哀愁感や力強さを織り交ぜて表現しました。

東海大学付属大阪仰星高等学校吹奏楽部

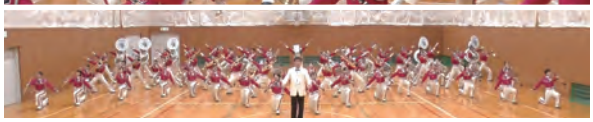
2019年に念願の全日本吹奏楽コンクール出場を果たし、見事銀賞を獲得。部員は138名。2020年11月のマーチングバンドフェスティバル2020（大阪城ホール）に向けて練習した『アース・ウインド&ファイアー』メドレーを演奏しました。

神戸弘陵学園高等学校マーチングバンド部

部員は22名と少人数ですが、「爆音」をモットーとした音の大きさが持ち味。『欅共和国』をテーマにした迫力のある演奏に加え、ダンス、バトン、ドラムのパフォーマンスや、各曲のソロパートも楽しめました。

早稲田摂陵高等学校ウィンドバンド

女子生徒だけの「吹奏楽コース」があり、現在、75名で活動。2020年６月に予定していたイタリアへの海外遠征がコロナ禍で中止となり、涙をのみました。イタリアのアリアである『オー・ソレ・ミオ』などを披露しました。



箕面自由学園高等学校吹奏楽部 ゴールデンベアーズ2020

2020年で創部28年目。部員105名の大所帯ですが、コロナ禍で全員では集まれず、パートごとや少人数での練習が自分の音を見つめ直すきっかけに。『枯葉』などのシャンソンメドレーや『ドラムライン』などを演奏しました。

＊本企画は、著作権の関係上、アーカイブでの配信は行っていません。

美術作家

佃（つくだ） 七緒（ななお）さん

今だから思いついたこと

個展「石積みの家との18＋9通信」の作品。前の持ち主の展示場所をイメージした背景を付け、「石積みの家」での写真（P15下）も添えられた。（ギャラリー佑英）

展覧会がだめなら…

昨年春から夏にかけて、新型コロナウイルスの影響でギャラリーや美術館が臨時休館を余儀なくされ、多くのアーティストが作品をじかに観てもらう機会を失くした。佃七緒さん（2020年度アーツサポート関西「岩井コスモ証券ASK支援寄金」助成対象者）も、3月に予定していた個展が10月に延期。たとえ開催したとしても、その作品は、直接手に触れて楽しんでもらうことを前提としているため、不特定多数の人が来る場で展示するにはためらいがあった。「展覧会がだめなら、個人の自宅や仕事場で観てもらえばいい」。佃さんは、展覧会の延期により生まれた時間で、作品を貸し出す『お家で展示プロジェクト』を行った。作品をプロジェクト参加者の自宅や仕事場に送付し、そこで展示・鑑賞してもらう企画である。

作品は、2018年5〜6月にかけて、佃さんがスペイン・バルセロナ北部の山中にある築400年の古家「石積みの家」に滞在して制作したもの。かつて当家で使われていた釘や蝶番などの金具を、現地で調達した手漉きの紙に貼り付け、それを当家の台所や居間など18か所に置いて写真で撮影。遺棄されて錆びついた金具に「新たな居場所」を与え、撮られた背景を含めて「作品」とした。その作品を収めた写真集のあとがきには、「古い金属の部品が次の居場所へ出発する前の、長く過ごした家での記念撮影のようなもの」と記されている。「次の居場所」とは、古い金具が紙や枠をまとって「作品」となり、それが購入などによって誰かの手にわたり設置されることである。佃さんは、写真に写った背景をイメージした木枠をつけ、9つの作品を準備した。

プロジェクト参加者に送られたのは、その作品である。プロジェクト期間は7月末までの1か月間。個展会場（ギャラリー佑英：大阪市西区）のオーナーの呼びかけもあって、同ギャラリーの常連客やアーティストたちが参加してくれた。佃さんは、「送り届けるというのはコロナ禍でなければ思いつかなかった。オーナーのご協力に感謝している」という。

新たな「居場所」で生まれる作品世界

スペイン滞在中から、「古家から作品として持ち出す金具の代わりに、作品を通して何か別のものを古家に戻したい」と考えていた佃さんは、その考えをコンセプトとして組み込み、次に手にする人にある義務を課すことを含めて作品とした。それは、次の持ち主が自身の感性で選んだ「新しい居場所」に作品を置いて撮影した写真を、スペインの「石積みの家」に送り、金具の物としての存在の代わりをイメージで返却する、ということである。『お家で展示プロジェクト』での作品貸し出しの際にもその条件は実行され、プロジェクト参加者によって新たな背景を付加された金具の写真がスペインに送られた。

故郷スペインを離れ、大阪、兵庫、京都、神奈川の参加者の手に渡った作品が写真に撮られ、石積みの家に届けられた。床の間の掛軸の前に置かれたもの、仕事場の机の上で私物と並んで置かれたもの、ビルの工事現場で働く人とのツーショットなど、中には写真集のようにして送られたものもあり、家主を驚かせたという。

また、佃さんは、作品が再び手元に帰ってきたとき、前の持ち主の展示場所をイメージした背景を付加することで、新たな作品化につながるのではないかと閃いた。昨年10月の個展では、佃さんの手でプロジェクト期間中に作品が置かれていた「掛軸」などの背景のイメージが足され、また新たな作品の世界を生み出していた。

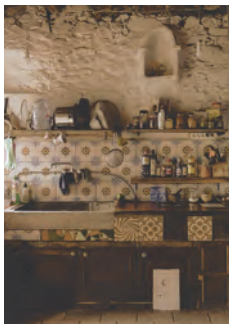
アーティスト・イン・レジデンス

大阪府出身の佃さんは、2009年に京都大学文学部(倫理学専攻)を卒業後、京都市立芸術大学美術学部工芸科

スペインでAIRを行った「石積みの家」

作品の素材となった金具類（石積みの家にて）

スペインでの制作風景（同左）



「石積みの家」の台所の床に金具を置いてを撮影
（写真提供：佃七緒さん）

（陶磁器専攻）を経て、同大学院を2015年に修了。大学院在学中から海外でのアーティスト・イン・レジデンス（Artist In Residence：AIR）を中心に活動してきた。AIRとは、一定期間ある土地に招聘されたアーティストが、その土地に滞在して異なる歴史や文化を吸収しながら創作活動を行うこと、またはそうした活動を支援する制度をいう。佃さんは母校の非常勤講師を務めるかたわら、コロンビア、ペルー、アメリカ、スペイン、オーストラリアで創作と展覧会を行ってきた。滞在期間は短くて1か月半、長くて4か月。「土地の人がどんな道具を使って生活し、その日常の中でどんな出来事が起こるのかを知るのが好き」。佃さんは、そうして得た情報をもとに、現地で馴染んでいる素材を使って立体作品や空間を制作してきた。スペイン「石積みの家」の作品にも、そうした想いが貫かれている。「だから作品を日本に持ち帰ると、現地で繋がっていた背景を断ち切ってしまった気がして、現在日本にいる者としての視点で新たに手を加えている」という。

作家の思いを「翻訳」する

コロナ禍の拡大で海外渡航が制限され、昨夏以降、佃さんは国内にいる時間が増えた。それが「そろそろ次のことを」と考えていたタイミングと重なり、AIRの経験を活かした新たな企画に取り組むこととなった。

AIRでは、その申し込みや現地スタッフ、滞在先の生活者などに、自分のしたいことを言葉で説明しなくては何も始まらない。佃さんは、作家たちが各々の活動場所から移動せずにAIRでの経験と重なる場づくりを目指して、昨年７～12月、芸術活動支援施設である一般社団法人HAPS（京都市東山区）で、5人のアーティストと協力者との対話を通して行うアートと「翻訳」の企画『ALLNIGHT HAPS 2020翻訳するディスタンシング』を主宰。作家が、必ずしも美術・翻訳を専門としない協力者を介して、制作・作品への考えを日本語から他言語へと置き換える過程を経験することで、作家にとっては次回作への準備につながり、協力者・鑑賞者にとっては作品や作家への関心を促す土台作りになればと考えた。さらに、そのプロセスを経た作家による展覧会シリーズも開催。今年3月23日まで、HAPSギャラリーにて夕方6時から翌朝9時半まで、屋外から鑑賞する展示が行われている。「このプロジェクトのために広報原稿を書いたり、ウェブでミーティングをしたりと、思ったより多忙な数か月でした」と佃さん。コロナ禍で移動が制限されたとはいえ、気持ちは常に外へ向けられている。

（ライター 三上祥弘）

写真（左）の背景をイメージした木枠や絵を付け、「お家で展示プロジェクト」の参加者のもとで新たな居場所を得た金具。10月の個展作品では、その背景も追加された（P15上）。

（写真提供：小野玲香さん／神戸三宮 Bar Le Bateau）

EXPO'70基金　2019年度 助成事業事例発表会

（2020年10月2日／大阪工業大学梅田キャンパス 常翔ホール）

関西・大阪21世紀協会は、日本万国博覧会記念基金*による助成事業を広く知っていただくため、2018年より、国内外の助成先を一堂に集めた助成金贈呈式と事例発表会を実施しています。しかし、2020年度はコロナ禍の影響により贈呈式を中止。2021年度の助成事業募集説明会と併せ、2019年度の助成先３団体の事例発表会を開催しました。当日は、日本各地から当助成事業への申請を検討している事業者の方々など80名が来場し、3団体の発表にも興味深く耳を傾けました。ここでは、その団体の活動についてご紹介します。

＊日本万国博覧会記念基金（EXPO'70 基金）
1970年に大阪で開催された日本万国博覧会の収益金の一部を元に創設。当協会は、2014年に独立行政法人日本万国博覧会記念機構から基金を継承・管理し、その運用益を国際相互理解の促進に資する活動や文化的活動に助成しています。

「平和と美術と音楽と」
Peace Art Project in ひろしま実行委員会

アートを通して平和を発信
夢や希望を感じてもらうのが広島の役割

中川圭子さん（事例発表会にて）

広島から世界に向けて平和を願い、アーティストが連携して夢や希望、癒やし、祈りの心を発信する「平和と美術と音楽と」（Peace Art Project in ひろしま実行委員会）。2017年に第１回が開催されて以来、原発事故で放射能被害を受けた福島県やウクライナと、原爆が投下された広島県、長崎県で「アート」を通じた交流を深めてきました。

2018年４月には、広島の演奏者とアーティストとともに「被爆ヴァイオリン」を携えてフランス（パリ）でのサロン・コンサートや、ウクライナ（キエフ・スラブチチ）での「チェルノブイリ追悼イベント・コンサート」に参加。「ヒロシマ」「ナガサキ」からの訪問が現地で大きな反響を呼び、感動的な交流が地元メディアで報道されました。また、8月には被爆建物の旧日本銀行広島支店でのコンサートの開催や長崎平和音楽祭への参加など、同年度で23か国・5700人が参加しました。

2019年には、被爆建物の旧日本銀行広島支店で被爆ヴァイオリンと被爆ピアノのコンサートや、子どもたちによる被爆樹木で作ったパンフルートの演奏、キッズゲルニカ（ピカソの『ゲルニカ』と同サイズのカンバスに描く平和の絵）など、さまざまなアートパフォーマンスが披露されました。また、サブイベントとして、アメリカでインディアンのホピ族の人たちと交流し、現地で演奏が行われました。ホピ族の住む地域からは、1945年にニューメキシコ州で行われた人類最初の核実験に使用されたウランが採掘され、それに従事したホピ族の多くが被曝（ひばく）しました。8月6日の原爆慰霊祭にホピ族の人たちが広島に来て祈りを捧げてくれたこともあり、以来、核の犠牲者の遺族を持つ者同士として交流し、平和への想いを共有しています。EXPO'70基金の助成金は、これらのイベント運営に役立てられました。

被爆75周年を迎えた2020年は、広島市の助成金（広島市文化芸術の灯を消さないプロジェクト）を得て、インターネットで実施。広島とニューヨークを拠点に、ヨーロッパ各国やパレスチナ、ルワンダ、ニュージーランドなど、世界14か国（17都市）から送られた44本の動画を、８月6日から翌７日にかけて24時間YouTubeで配信しました。

事例発表会では、実行委員会代表の中川圭子さん（NPO法人Heart of Peace ひろしま代表理事）が、「75年間は草木も生えないといわれた広島が、2020年、ついに被爆後75年目を迎えました。今、広島には緑が溢れ、まちには子ども達の歓声が響いています。この復興は、日々懸命にまちを育ててくださいました先輩方の努力と、世界中の人々が広島に想いを寄せ、祈りの気持ちを向けてくださったおかげ。平和とは、一人ひとりが心の中に平和を感じることだと思います」と挨拶。続いて、ヴァイオリニストの佐久間聡一さん（広島交響楽団第一コンサートマスター）による被爆ヴァイオリンの演奏が披露されました。

このヴァイオリンは、戦前、広島女学院のロシア人音楽教師だったセルゲイ・パルチコフさんの所有物で、爆心地から2. 5 kmの地で被爆し、2014年に修復されたもの。後年、同氏の祖父がウクライナ・キエフの出身で、ヴァイオリンは当地で作られたものだと分かりました。佐久間さんは、「これを弾くと、75年前に大切にこの楽器を持っていた方と、その方の演奏を聴いて感動した方がおられたことを思う。その独特の音色を味わって聴いていただきたい」と述べ、『タイスの瞑想曲』と『ラルゴ』が奏でられると、会場が優しく温かな雰囲気に包まれました。

中川さんの母親は入市被爆者（原爆投下直後に爆心地近くに入り、残留放射線の影響を受けた人）でしたが、自分が被爆していることを公にせず結婚し、子どもの結婚にも影響

があると思い、言えなかったそうです。当時は被爆者に対する強い差別や偏見があったからです。そのため中川さんも結婚するまで被爆２世であることは知らされず、出産後しばらくして、夫婦お互いが被爆２世だと分かったのでした。

そんな中川さんが子どもの頃、毎年8月6日になると叔母に連れられて広島平和記念式典に行くのが恒例でした。しかし、そこで核廃絶や戦争反対を訴える人たちのシュプレヒコールやデモ行進を目にするのが嫌で、子ども心に「どうしてみんなハチロク（原爆の日）を静かに迎えることができないのだろう」と思っていたそうです。その日は多くの人の命日で、中川さんの祖父も被爆して行方がわからないままだったからです。

その思いは大人になっても変わりませんでした。また、8月6日が近づくと世界各国から人が来て、平和を訴えるさまざまなイベントが行われるのですが、そうした「お祭り」のような状態に広島市民が慣れてしまい、自分たちのまちのことなのに無関心な人が多いことにも違和感を持つようになりました。そこで、そういう「運動」とは違う形で、広島から平和を発信できないかと思っていたときに出会ったのが「音楽」でした。

被爆ヴァイオリンで演奏する佐久間聡一さん（事例発表会にて）

中川さんは、2016年に東日本大震災の復興支援を行うNPO法人「Heart of Peace ひろしま」を設立しました。きっかけは、2011年11月に開催された東北チャリティーコンサート（世界平和記念聖堂／広島市）で、東日本大震災の犠牲者への慰霊を込めた被爆ピアノでの演奏とその場での観客の祈りに、衝撃を受けたことでした。東北に向けられたわずか3分間ほどの黙祷が、音楽が加わることで劇的な静寂と感動の空気に包まれたのです。「音楽は国も言葉も超え、感動を通して心をひとつにする」と確信した瞬間でした。

中川さんは、「広島は被爆後75年を過ぎ、今は世界に希望と夢を、そして真の平和を発信することのできる場所になっています。これからは日本の文化、スピリットを世界に発信する時が来ていると思います」と、力を込めて語りました。

▼「平和と美術と音楽と 2019」実施のようす

広島市立千田小学校児童によるパンフルート演奏
（旧日本銀行広島支店／2019年8月4日～6日）

キッズゲルニカ制作後の記念写真
（なぎさ公園小学校）

ホピ族居留地での交流会
（アメリカ・アリゾナ／2020年2月25日）

「ビヨンドトゥモロー アジアサマープログラム 2019」
一般財団法人 教育支援グローバル基金

「逆境は優れたリーダーを創る」を理念に困難を経験した若者の成長を応援

坪内南さん

ホームステイ先のタイ・モン族の若者たちと一緒に
（写真提供：一般財団法人教育支援グローバル基金）

日本には、親との死別・離別を経験したり、虐待やネグレクトから保護されて児童養護施設や里親のもとで暮らしていたり、貧困家庭で暮らしてきた若者が多くいます。教育支援グローバル基金（橋本大二郎代表理事／元高知県知事）は、そうした困難を経験した高校生・大学生を対象に、進学のための奨学金給付や国内外での人材育成プログラムを実施。彼らが経験した逆境は人への共感力を育む重要な資質であると位置付け、広い視点と深い共感力を持って活躍できる人材輩出を目指しています。

「ビヨンドトゥモロー アジアサマープログラム」は、そうした人材育成プログラムの一つです。2019年度は、9月に奨学生の中から8名の大学生がタイを訪問。バンコクの日本大使館や国連機関でアジアの経済成長について話を聞き、現地のNPOの案内で、経済成長の裏で取り残されたスラム街の実情を視察しました。また、山岳少数民族・モン族の村を訪問し、3年前に電気が通ったばかりの村でホームステイ。同じ年頃の若者のニーズを聞いたり、経済成長とは異なる世界での生活様式を体験したりしました。さらにシンガポールとインドネシアにも行き、タイでのフィールドワークを日本大使館や企業にて英語で発表し、意見交換を行いました。

事例発表会で同基金の坪内南さん（マネージングディレクター）は、「昔に比べて海外留学がしやすくなったとはいえ、経済的理由でそれができない若者が日本にも世界にもたくさんいる。世界の調和的な発展と寛容な社会を実現するためには、そうした若者がチャンスを得ることは非常に重要なこと」と呼びかけました。また、参加学生の前橋亮介さん（広島大学教育学部）は「世界には自分が知らない職業が満ち溢れていること、自分が想像する以上に過酷な生活をしている人がいること、幸せは身近なところにあることを知った。これらの気づきを踏まえて幅広く学びを深め、夢を追いかけていきます」と語りました。

「2019 オーストリア・ポーランド雅楽公演」
公益社団法人 北之台雅楽アンサンブル

両国の長きにわたる友好を世界最古のオーケストラが祝福

井口峰子さん

ウィーンの世界博物館での演目「舞楽・北庭楽（ほくていらく）」を披露
（事例発表会にて）

千数百年の歴史を持ち、「世界最古のオーケストラ」と呼ばれる伝統芸能「雅楽」。北之台雅楽アンサンブル（千葉県いすみ市）は、その演奏を通して数多くの国際文化交流を行っています。とくに国家間の修好記念年の機会に、外務省の招聘のもと、日本政府主催公演を世界各地で開催。2019年は、日本・ポーランド国交樹立100周年および日本・オーストリア修好150周年の節目の年にあたり、「100年、150年より1000年へ― 雅楽千年のオーケストラによる祝賀」と銘打ち、両国の友好発展を願ってオーストリアとポーランドで雅楽公演を開催しました。

現地での滞在は7月2日～11日。公演初日の３日は、オーストリア・リンツ市の由緒あるシュテイレッグ城で開催しました。公演後のレセプションでは来場者にお茶がたてられ、大変喜ばれました。5日にはウィーンの世界博物館で実施。小井沼紀芳在オーストリア日本国特命全権大使、世界博物館シッケルグルーバー館長、墺日協会レオポルド会長も来場し、日本・オーストリア修好150周年を祝いました。7日には、ウィーンから約500㎞の長距離を大型バスで半日かけて移動し、ポーランドの古都・クラクフへ。浮世絵収集家として著名なフェリックス・マンガ・ヤシェンスキ（1861～1929年）のコレクションを所蔵する日本美術技術マンガ博物館で、当館初の雅楽公演を行いました。最終公演日の9日には、首都ワルシャワにあるアジア太平洋博物館で「浦安の舞」を披露。この演目は、昭和天皇が詠まれた世界平和を祈る歌「天地の神にぞ祈る 朝なぎの 海のごとくに 波立たぬ世を」をもとに創作されたものです。ポーランドは戦争で他国の侵略を受けた不遇の歴史があり、平和を願う力強い舞に涙する人もいました。

事例発表会でこれらを説明した井口峰子さん（北之台雅楽アンサンブル副理事長）は、「千年の歴史を持つ雅楽を紹介させていただくことで、異なる文化の理解、新たな国際親善につながることを実感した」と振り返りました。

2020年度

2020年度 助成先の事業紹介

今年度助成が決定した50事業の中より、事業者から寄せられた報告をご紹介します。

芸術資源研究センター重点研究プロジェクト ーバシェ音響彫刻 特別企画展ー

事業者：公立大学法人 京都市立芸術大学
交付決定額：140万円
実施期間：2020年11月7日～12月20日
実施場所：ギャラリーアクア

1970年大阪万博において、鉄鋼館（現・EXPO'70パビリオン）ホワイエに展示された17基のバシェの音響彫刻のうち、これまでに修復された6基中5基が京都に集い、修復過程のアーカイブなどを展示するとともに、毎週末には音響彫刻を用いたイベントが行われました。2013～2017年にかけて修復された5基の音響彫刻は、普段は万博記念公園、京都市立芸術大学、東京藝術大学に分かれて保存されているため、今回の企画展のために分解し、会場までトラックで搬送されてきた部材を元の姿に組み立てる、という大仕事からのスタートでした。7回のコンサート、3回のワークショップ、そしてパレット・ソノール（バシェの教育音具）の体験コーナーの人気も高く、会期中3,128名の来館者で賑わいました。また、オンライン開催となった国際シンポジウムも、フランス、スペイン、カナダ、日本からバシェ研究者たちが参加し、それぞれの活動報告や今後の展望について、有意義な意見交換がなされました。

展示風景（© Takeru Koroda）

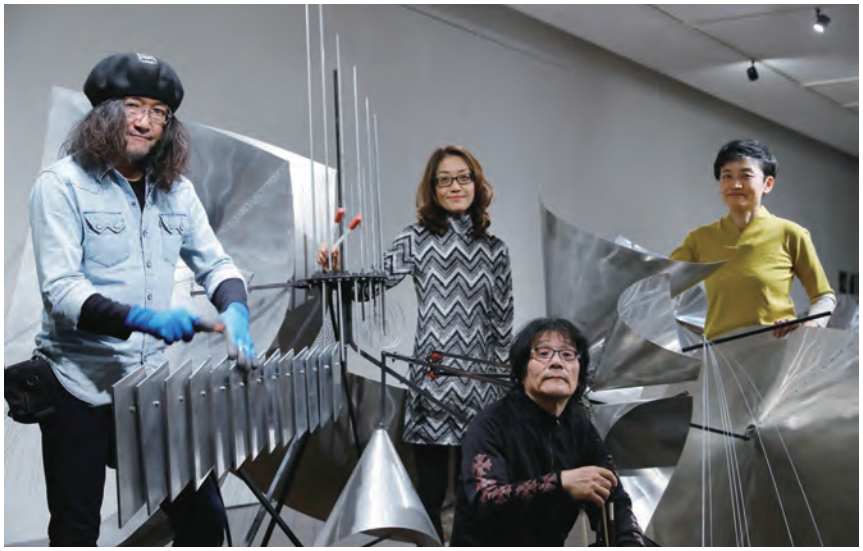
万博というユニバーサルな場で作られたバシェの音響彫刻を、貴重な芸術資源として多くの人々に知らしめ、その多彩な響きを後世に伝え継いでいくことは、万博記念基金から助成を受けた私たちの大事な使命でもあり、また大きな喜びでもあります。コロナ禍の狭間で会期を全うできたことは誠に幸運でした。

（企画代表者：岡田加津子 京都市立芸術大学教授）

＊バシェの音響彫刻…フランス・パリを拠点に活動していた音響技術者のベルナール・バシェ（1917～2015年）と彫刻家のフランソワ・バシェ（1920～2014年）の兄弟によって考案された音の鳴るオブジェ。

▼バシェ音響彫刻の演奏（アンサンブル・ソノーラ）

アンサンブル・ソノーラ（左から渡辺亮さん、岡田加津子さん、沢田穣治さん、北村千絵さん）



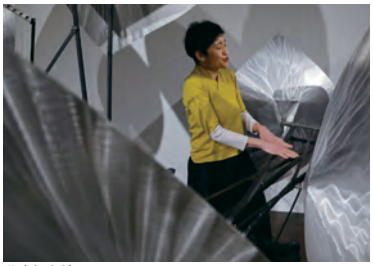
渡辺亮さん

岡田加津子さん

▼ワークショップ

バシェの教育音具を用いた、子どものためのサウンド・ワークショップ

（© N.U.I.project）


北村千絵さん

沢田穣治さん

（©Takeru Koroda）

コロナ禍の中ASKは「アーティストファースト」で支援しています

皆さまの寄付で芸術・文化活動を支援するアーツサポート関西は、コロナ禍で多くのアーティストが活動の中止・延期に追い込まれている中にあって、2020年度も「アーティストファースト」の視点で、支援を行っています。

オオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラ

Osaka Shion Wind Orchestra

公益社団法人 大阪市音楽団

長谷行康さん

日本で最も長い歴史と伝統を誇る交響吹奏楽団

2020年11月の第133回定期演奏会（ザ・シンフォニーホール）で、世界初演となる『スリー・ダンス・ミニチュアズ』（フィリップ・スパーク作曲／秋山和慶指揮）を披露したオオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラ。「ウィンド・オーケストラ」は吹奏楽団の意味ですが、この日、Shionの繰り出す迫力あるサウンドは、まさに草原に吹く一陣の風のように聴衆の心を揺り動かしました。「トランペットやクラリネットなどの旋律を奏でるパートが多く、重厚な旋律の響きがShionの持ち味であり人気の理由」と話すのは、ホルン奏者の長谷行康さん（常務理事兼事務局長）。新型コロナウイルス感染防止対策として、入場者が制限される中、チケットは早々に完売しました。

◈

同楽団は1923年に元陸軍軍楽隊の有志を中心に結成され、長らく「Shion（しおん）」（大阪市音楽団）の愛称で親しまれてきました。2014年に大阪市直営から民営化され、現在の名称に変更。以来、テレビ朝日『題名のない音楽会』への出演や、NHKの歌番組で演歌歌手のバックバンドを務めるなど、活躍の場を全国区へと広げてきました。全日本吹奏楽コンクールの課題曲（参考演奏）の収録も行っています。さらに、音楽監督の宮川彬良さん（作曲・編曲家）の誘いでショーの世界へ。ホテル・ハイアット リージェンシー 大阪（大阪市住之江区）のクリスマスディナーショーには、7年連続で出演しています。ここでは定期公演のクラシックとは異なり、昭和歌謡やジャズ、映画音楽など、さまざまなジャンルの曲が披露されています。

◈

「ディナーショーなんて、公務員時代には夢にも思いませんでした。民間団体となっては集客数が収入と直結するため、自分たちで大阪市外の企業や自治体にもこつこつと営業活動を行ってきました。『大阪市音楽団』から『Shion』へと名称を変えたのも、これから大阪市以外へ活動範囲を広げ、他都市に受け入れてもらいやすくするためで、〝大阪市〟のイメージを取り、〝Shion（しおん）〟という響きを残しています。私たちにとって、お客様に喜んでいただくことが一番嬉しい。そのためには演奏機会を増やすことが第一。こうして現在、年間150～160ステージをこなしています」と長谷さん。

実は、市音は民営化される7年ほど前から、市の財政難によって団員の新規採用をしませんでした。そのため演奏者が42人必要なところ26人にまで減少し、存続の危機にあったのです。さらに、民営化にあたり当時の団員には辛い選択が迫られました。その内容は、自主退職後給料が1/3に減っても音楽家として生きていくのか、市の職員として残るため他部署の試験を受けるのかというものです。ただしこの場合、不合格になってもShionには移籍できないという厳しいものでした。当時の長谷さんは、人それぞれ家庭の事情があり、「伝統を守るために一緒に頑張ろう」とはいえなかったそうです。さらに「これからも良い音楽を届け続けることで、大阪市の職員として残った人たちが、自分もShionにいたという誇りを感じてもらいたい」といいます。

◈

ところで、長谷さんが吹奏楽（ホルン）を始めたのは高校時代から。家にピアノがなかったため、大阪音楽大学の入試に備えて毎日始発電車で登校し、放課後は遅くまで音楽室のピアノで練習したそうです。同大卒業後は大阪フィルハーモニー交響楽団やザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団（首席奏者）などを経て、1990年に「大阪市音楽団」に入団しました。

演奏家の育成も重視しているShionでは、学校吹奏楽の指導や、一般の人に演奏技術を指導する「月イチ吹奏楽」を行い、長谷さんも毎月指導にあたっています。プロ演奏家によるこうした取り組みは他都市ではあまり例がなく、長谷さんは、こうして一人でも多くのShionファンを増やし、〝将来Shionに入りたい〟という人が出てきてほしいと願っています。

第133回定期演奏会（2020年11月26日／ザ・シンフォニーホール）

クリスマスディナーショーでの演奏（ハイアット リージェンシー 大阪）

「月イチ吹奏楽」で指導する長谷さん（後姿）

写真提供：公益社団法人大阪市音楽団

美術（岩井コスモ証券ASK支援寄金助成）

堤（つつみ）　拓也（たくや）（キュレーター）

活動概要▶展覧会の企画開催

堤さんは、現代美術の展覧会を企画するフリーランスのキュレーターです。京都と滋賀の県境にある、若いアーティストたちの共同アトリエ「山中Suplex」で行われる展覧会のディレクターでもあり、2020年11月に、ドライブイン形式の展覧会『類比の鏡／THE ANALOGICAL MIRRORS』を企画・開催しました。

展覧会は日没から始まり、作品の鑑賞はすべて車の中から。完全時間予約制です。アトリエの画材や機材の合間に彫刻や映像作品などが展示されており、バラックのような小屋をサファリパーク感覚で巡っていきます。展示には鑑賞者の視点への配慮がなされ、普段より集中して見ることができました。

『類比の鏡／THE ANALOGICAL MIRRORS』
撮影：前谷 開

窓をあけると周囲の深い森から冷たい空気が感じられます。展覧会の不思議な状況に、芸術の理解に理知的な説明は不要であることを感じさせられました。

美術（岩井コスモ証券ASK支援寄金助成）

野原（のはら）万里絵（まりえ）（現代美術）

活動概要▶ワークショップ開催や作品の制作など

野原さんの作品は、多くの人々の力を借りて制作されます。2020年11月に枚方市で行った展示では、大人や子供たちから理想の公園のイメージを募集し、アイデアを出した人たちと一緒にイメージを膨らませ、形を整え、色を足し、また会場の道具や備品なども取り込んで、空間インスタレーション作品をつくり、展示しました。

また、青森市にある国際芸術センター青森に秋から冬にかけて３か月間滞在し、地元の人々に青森の海岸で拾ってきた石を見せて絵に描いてもらい、そこから感じ取ったインスピレーションをもとに、野原さんが少しずつ手を加え、組み合わせを考えて、壁いっぱいに広がる大きな一つの作品として構成しました。

展示作業をする野原万里絵さん
撮影：小山田邦哉　写真提供：国際芸術センター青森

野原さんの作品では、いろいろな人の想いが彼女の感動や発見となり、そこから作品が生まれます。人と人とがつながることの豊かさを、それは教えてくれます。

伝統芸能（一般助成）

林本（はやしもと）　大（だい）（能楽師）

活動概要▶能の魅力を伝える普及活動

能楽師の林本さんは、大学で能の魅力に触れ、世襲ではなく一般の家庭から能楽の道に入りました。

能などの伝統芸能を多くの方に知ってもらいたいと、落語、講談、文楽などの若手演者とともに若い世代向けの舞台公演を行うほか、能をわかりやすく解説する入門講座「能meets」を2019年に立ち上げ、ほぼ月１回のペースで能楽の紹介に取り組んできました。

「能meets」は、今年のコロナ禍においても精力的に行われ、主に大阪・北浜と岸和田の２つの会場を使って、能装束や小道具をはじめ、舞や殺陣、演目の解説など、「あまり知られていないが、実は知れば知るほど能楽が面白くなる」小ネタやエピソードをふんだんに披露。

杉江能楽堂（岸和田市岸城町）での「能meets」

コロナで前半は活動できなかったにもかかわらず、半年間で延べ600人以上が参加し、能の奥深い魅力に多くの人々が触れることとなりました。

音楽（岩井コスモ証券ASK支援寄金助成）

堀江（ほりえ）恵太（けいた）（ヴァイオリン）

活動概要▶自主企画による演奏活動など

コロナ禍にもかかわらず、堀江さんは2020年、積極的に演奏活動に取り組んでいます。8月には兄のチェリストの牧生さん、妹のピアニストの詩葉さんとともに「堀江トリオ」として、ザ・シンフォニーホールが行う公式オンライン演奏会の第1回目の出演者に選ばれ、ホールの舞台から素晴らしい生演奏を披露。「堀江トリオ」としては、ABCアナウンサーで父の政生さんとともにクラシックの魅力を伝えるネットラジオ番組もライブ配信中です。また、7月にはNHK・FMの若手演奏家を紹介する番組「リサイタル・パッシオ」にも出演しました。

感染拡大が少し落ち着いた９月からは、同世代の演奏家仲間に声をかけて企画した室内楽コンサートを数多く開催。その数は12月までの3か月間で10回にのぼります。

演奏会の仲間とともに：左から堀江恵太さん
福岡昴大（ふくおかこうだい）さん
柳原史佳（やなぎはらあやか）さん
谷口晃基（たにぐちこうき）さん

コロナ禍であるからこそ表現したい音楽がある ── 堀江さんの活動から、そんな熱い想いが伝わってきます。

AWARD 令和2(2020)年度 関西元気文化圏賞贈呈式

(2021年1月25日／リーガロイヤルホテル大阪)

こども本の森 中之島と安藤忠雄さんに大賞を贈呈
ミルクボーイ、田中希実さんらにニューパワー賞

安藤忠雄さん

文化・芸術・スポーツなどの分野で活躍し、関西から日本を明るく元気にした人や団体へ、感謝と一層の活躍を期待して贈られる「関西元気文化圏賞(関西元気文化圏推進協議会／関西・大阪21世紀協会も構成員)」。2003年に始まり18回目となる今回は、2020年7月にオープンした児童図書館「こども本の森 中之島」と、同館を設計・建築し大阪市に寄附した建築家・安藤忠雄さんに大賞が贈られました。同館は、大阪市出身の安藤さんが「本や芸術文化を通じて子どもたちが豊かな創造力を育むため、中之島公園内に図書館を整備して大阪市に寄附し、運営費用も大阪市への寄附を呼びかけていきたい」という提案を受けて実現したものです。大阪都心・中之島の新たな文化拠点として、さらなる賑わいの創出にも貢献すると期待されています。

また、将来性が期待できる人や団体に贈られるニューパワー賞は、M-1グランプリ2019で史上最高得点を得て優勝し、一躍全国区の人気者となったお笑いコンビ、ミルクボーイ(内海崇さん〈兵庫県出身〉、駒場孝さん〈大阪府出身〉)や、東京オリンピック・陸上女子5,000mの日本代表に内定した田中希実さん(兵庫県出身)、2025年大阪・関西万博のロゴマークを制作し万博開催の機運醸成に寄与したTEAM INARI(代表:シマダタモツさん〈大阪府出身〉)、第7回全国高校生手話パフォーマンス甲子園(2020年9月／鳥取県)で3度目の優勝を果たした奈良県立ろう学校演劇部に贈られました。特別賞は、2020年3月にワーグナーの大作オペラ『神々の黄昏』を無観客上演(YouTubeで無料配信)し、41万人の視聴を得た滋賀県立芸術劇場・びわ湖ホールに贈られました。

田中希実さん(右)と関西元気文化圏推進協議会 松本正義会長(左)

ミルクボーイの内海崇さん(右)と駒場孝さん(左)

EVENT 堂島薬師堂節分お水汲み祭り 主催：堂島薬師堂節分お水汲み祭り実行委員会

(2021年2月2日／堂島薬師堂・大阪市北区)

薬師寺僧侶が新型コロナ退散を祈願

推古天皇の時代に起源を持つ堂島薬師堂では、かつてここにあった井戸の水を汲んで薬師如来にお供えする慣わしがありました。この故事にちなみ、大阪・キタの賑わいづくりと水都大阪の再生をめざし、関西経済同友会の提言を受けて2004年に始まった「堂島薬師堂節分お水汲み祭り」。第18回の今年は、新型コロナウイルス感染症対策として堂島薬師堂での奈良の薬師寺僧侶による節分法要と、竹筒護符の引き換えおよびお水汲みに限定して実施されました。疫病退散、無病息災、商売繁盛を祈願して読経が始まると、沿道から手を合わせる近隣の人の姿も見られました。

僧侶から竹筒にお香水(こうずい)を受ける(堂島薬師堂)

INFORMATION インターネット番組『ぶらり関西歴史旅』

3月5日キタ編・12日ミナミ編アップ!
関西・大阪21世紀協会ウェブサイト

第1回 大阪キタ編・第2回 大阪ミナミ編

江戸時代の地図を手に、大阪の昔と今を比べながら「ぶらり歩き」する企画。「なにわの地理博士」こと大手塾・予備校 東進ハイスクールの人気講師・村瀬哲史さんが案内役となり、野球大好きアナウンサーの市川いずみさんが、普段何気なく歩いている大阪の街で数々の意外な発見をします。第1回大阪キタ編は梅田周辺から北新地へ、第2回大阪ミナミ編では難波を中心とした繁華街をぶらり探訪。大阪土産「きんつば」の名前の由来は?答えは番組で!

村瀬さん(左)と市川さん(右)

関西・大阪21世紀協会 賛助会員ご入会のお願い

当協会の主たる活動財源は、賛助会員の皆さまの会費収入です。
文化による関西・大阪の活性化のため、当協会へのご支援をお願いいたします。

会　費 (何口でも結構です)	法人会員…1口につき年会費10万円 個人会員…1口につき年会費1万円 ※賛助会費は税制上の優遇措置を受けることができます。
会員特典	1. 協会が発行する各種刊行物の配布 2. 協会が主催する講演会、見学会、行催事への特別優待 3. 賛助会員相互の交流

お問い合わせ　公益財団法人 関西・大阪21世紀協会　総務部(TEL.06-7507-2001)

本誌を毎号送付いたします

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会
ホームページ https://www.osaka21.or.jp

発　行　日／令和3(2021)年3月10日
編集・発行／公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
〒530-6691 大阪市北区中之島6丁目2番27号 中之島センタービル29階　TEL.(06)7507-2001 FAX.(06)7507-5945
発　行　人／﨑元利樹　編集協力／株式会社インサイト　印刷／東洋紙業株式会社